

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	知財見聞録, 韓国慶北大学での学会発表と歴史探訪
Title(English)	
著者(和文)	田中義敏
Authors(English)	Yoshitoshi Tanaka
出典(和文)	発明, Vol. 114, No. 7, pp. 28-29
Citation(English)	, Vol. 114, No. 7, pp. 28-29
発行日 / Pub. date	2017, 7



知財見聞録

韓国慶北大学での学会発表と歴史探訪

東京工業大学 工学院 経営工学系・経営工学コース 教授 田中 義敏

慶北大学での学会発表

本年2月7日、8日の両日、韓国慶北大学法科大学院IT&LAW Research Instituteが主催する国際会議に招かれて講演をしてきた。会議のテーマは、「知的財産保護とグローバル社会」であったが、筆者の講演は、「グローバル社会における知的財産戦略の策定と実行に求められる知財人材」に関するものとした。

これまでは国内中心の特許保護であったが、グローバル化の進展に伴い、今後は世界市場での特許戦略が必要になる。2011年以降日本から海外への特許出願件数は着実に増加している。日本企業における知財分野のグローバル化の進展が表れているものと思われるが、外国への特許出願戦略をどのように策定しているのだろうか。

特許発明に係る技術を用いた製品を製造・販売している国、競合企業が参入している国、さらには、特許発明の技術内容、基本性や改良性、出願国における市場の現状と将来、出願人企業におけるビジネス上の位置づけ等、多くの要素を踏まえて戦略が策定されているに違いない。

また、知的財産権を取得するだけでは十分でなく、知的財産権を事業に活用する人材が求められている。しかもグローバル化の進展のなかであって、国際舞台で活躍できる知財活用人材を養成しなければならない。

わが国産業界がグローバル社会で直面する外部環境要因を分析して機会と脅威を認識し、一方で内部資源分析により自らが保有する強みと弱みを認識したうえで、内部資源である強みを生かして外部に存在する機会を捉えるためにはどのような知財活用人材を育成していかなければならないか、その課題の解決は容易ではないように思う。

韓国での学会活動で感じたこと

今後は、日本の技術が世界のなかでどのようなポジションを確保し、リーダーシップを発揮していけるかという視点が重要である。イノベーションの対象技術は必ずしもハイエンドの先端技術だけではなく市場ニーズをさらに満たす改良技術も含まれるが、日本の先端技術と改良技術をいかに戦略的に活用していくかが大きな課題である。

産業分野にもよるが、韓国はもはや先進国である。先進国においては模倣が困難な先端技術を用いた製品による競争が中心となるため、基本特許に比重を置いた選択と集中により、ハイエンド領域をリードしていかなければならない。先端技術分野においては、思い切って改良出願や防衛出願はしないという考え方も成り立つであろう。

また、いまだ発展途上の産業分野では、韓国でどのように保護すべきよりも、どのようにして技術移転していくかという戦略が必要となるであろう。

う。韓国の産業界といかに向き合い、また協働していくべきか、わが国産業界がリードしてグローバル化というハードルを乗り越えていかなければならないだろう。

慶北大学から河回村へ歴史探訪

国際会議での発表終了後、研究者交流ということで安東市河回村（ハフェマウル）に案内していただいた。

安東市は、200を超える多様な文化財を有する歴史と文化の街として知られ、その代表が河回村である。慶北大学が所在する大邱市から北へ車で1時間半ほど走ったところに位置する。河回村は2010年にユネスコ世界遺産に指定されており、入り口では世界遺産の記念碑が迎えてくれる。筆者も慶北大学の博士課程の学生さんと笑顔のツーショット。



筆者の発表



慶北大学法学部長を囲んで

逸材を輩出した村

河回村は、高麗時代末期に官職に就いた柳従恵がこの地に居を構えて以来、柳氏一族が600年余りにわたり代々暮らしてきた村である。昔の貴族や庶民が住んでいた多様な様式の家屋がそのまま残り、現在も貴族の子孫が先祖から受け継いだ屋敷を守り暮らしている。

河回村は、儒学者の柳雲龍、文禄・慶長の役の時に領議政（現在の首相に相当）を務めた柳成龍など、多くの偉人を輩出しており、この地からは優秀な人材が生まれるとの評判がある。

どの集団にも象徴が必要

村の中央には、御神木とされている「三神堂」の樹齢600年のケヤキが堂々と立ち、村を守っているかのようであった。願い事を書いた紙をケヤキの

周囲に結びつけることができるようになっていたので、筆者は「世界平和」と書いてお祈りをしてきた。なんと、河回村の全ての建物は、このケヤキを中心に、村の周りを流れる洛東江の方を向いて建てられている。この特徴的な配置の理由を韓国の友人に尋ねたが、そこまでは分からなかった。そして、貴族階級が住んでいた瓦ぶきの家の周囲を庶民階級のわらぶきの家を取り囲んでいる。

豊山柳氏宗家（柳雲龍の末裔^{まつえい}）の屋敷である養真堂や、柳成龍の住居であった忠孝堂など、両班（高麗時代から始まった貴族階級^{ヤンバン}）の暮らしをうかがうことのできる瓦ぶきの古い建築や、わらぶきの家々が数多く保存されており、また、仮面劇である「河回別神クッ」も伝えられていて、わずか1時間の滞在であったが、韓国の伝統文

化にどっぷりとつからせていただいた。600年前の韓国にタイムスリップした気分であった。

温故知新

近年の韓国社会では、大統領の失脚劇が後を絶たない。先祖を敬い、伝統と歴史を維持し誇りに思う民族の価値観が見えにくい時代になっているような気がする。今の世の中をつくり上げてきたのは過去の多くの人々、私たちがつくり上げるのはこれからの世の中。伝統と歴史を大切にすることの意義を皆で共有したい。

この機会に河回村を訪問できたことは筆者にとって、近年の難しく複雑な社会に惑わされることなく、伝統と歴史に学び、常に本来的な価値観を見つめ直すことの大切さに気付かせてくれたような気がする。



世界遺産河回村の入り口で



大儒学者・柳雲龍の住まいだった養真堂



時の領議政、柳成龍



樹齢600年のご神木であるケヤキ